埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊2

仁科弘之教授退職記念論文集
言語をめぐる$x$章－言語を考える、言語を教える、言語で考える－

# 現場指示におけるソ系の指示語について

## —聞き手用法と中距離用法と—

金井 勇人

埼玉大学教養学部・人文社会科学研究科

# 現場指示におけるソ系の指示語について

## －聞き手用法と中距離用法と－

金井 勇人

【キーワード】
指示語、現場指示、ソ系、聞き手用法、中距離用法

【要旨】
現場指示におけるソ系の指示語の用法は、聞き手用法と中距離用法に大別される。従来、聞き手用法が現れる場面を人称区分型と、中距離用法が現れる場面を距離区分型と呼んで区別してきた。しかし、この 2 つの型だけを見ている限りは、聞き手用法と中距離用法を統一的に説明することは困難である。このような統一的な説明は、他言語との対照などにおいて重要となってくる。そこで本稿では、人称区分型と距離区分型が分化する前の中間型に焦点を当て、これを端緒に両用法の統一的説明を試みた。その結果、ソ系の原初的な性質を［－近称］であることを導き出した。

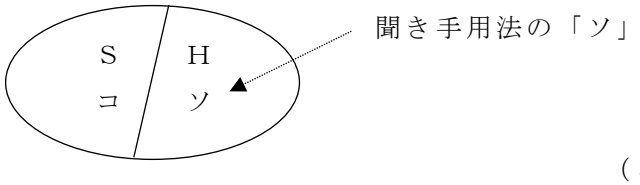
### １．はじめに

#### 1-1　人称区分型と距離区分型

現場指示におけるソ系の指示語の用法は、会話の場面の型によって聞き手用法と中距離用法の２つに大別される[1]。

まず聞き手用法であるが、この用法は人称区分型において現れる。

（1）人称区分型




（Ｓ：話し手、Ｈ：聞き手）

[1] 以下の図は三上（1953、1955）や正保（1981）等を参考にしている。

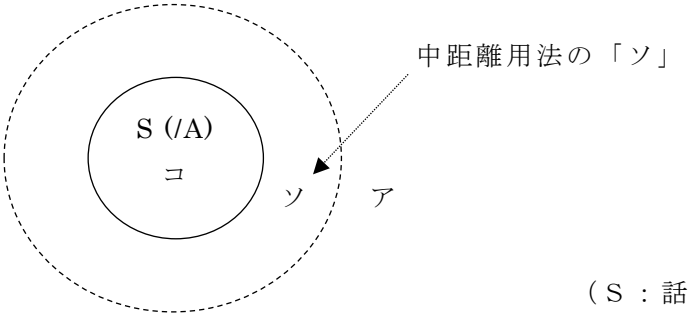
ＳとＨが互いに対立する領域を構成しているのが人称区分型である。そしてＳ（話し手＝指示者）は、Ｓ自身の領域をコ系で、Ｈ（聞き手＝被指示者）の領域をソ系で、それぞれ指示する。

（2）（電車内で、向かい側の座席に座っている花子の持つ箱を指して）
太郎「花子ちゃん、その箱、何が入ってるの？」
花子「次郎君へのプレゼントが入ってるのよ」
（太郎＝Ｓ、花子＝Ｈ）[2]

この場合の「その箱」におけるソ系は、聞き手の領域を指しているので、聞き手用法と呼ばれる。

次に中距離用法であるが、この用法は距離区分型において現れる。

（3）距離区分型




（Ｓ：話し手、Ａ：相手）

Ｓ(/A)から近距離の領域はコ系、中距離の領域はソ系、遠距離の領域はア系、というように距離を異にする三層の領域から成るのが距離区分型である。

なお本稿では、距離区分型においてＳとともに指示者の領域にいる参与者を、Ａ（相手）と表記する。

（4）（電車内で並んで座る太郎と花子が、向かい側の座席にある箱を指して）
太郎「花子ちゃん、その箱、誰かの忘れ物かな」
花子「そうね、次の駅で、駅員さんに知らせてあげようか」
（太郎＝Ｓ、花子＝Ａ）

この場合の「その箱」におけるソ系は、Ｓ(/A)から見て中距離の（コ系で指すには遠く、ア系で指すには近い）領域を指すので、中距離用法

[2] 筆者による作例。以下、特に断りがない場合は、筆者による作例である。

と呼ばれる。
　また、中距離用法の特徴として、独り言では使用できない、ということが挙げられる。

（5）（電車内で、向かい側の座席に置かれた箱を指して。独り言）
「??その箱は何だろう。誰かの忘れ物かな」

このように、中距離用法が成立するときには、Ｓと同じ領域に、必ずＡが存在していなければならない。

### 1-2　double binary

　三上（1953、1955）は、この 2 つの型に対応して、2 つの使用原理が存在することを、double binary と称した。double binary は、ソ系の指示語の 2 つの用法を的確に説明するためには、大変有効である。
　しかし、ソ系の統一的な説明にとっては、やや不都合がある。なぜなら、人称区分型のソ系と距離区分型のソ系は、異なる体系に属するからである。2 つの異なる体系からは、2 つのソしか説明できない。統一的な説明のためには、体系を一元化する必要がある。
　そこで本稿では、この 2 つの型が未分化である段階の、原初的な型である中間型に注目して、考察を進めていく。

## ２．先行研究

　筆者は金井（2007、2010）において、人称区分型と距離区分型が未分化の段階にある中間型について論じた。

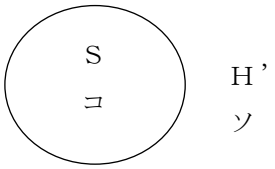
（6）「おい、そこの若ぞう」と松田はずんぐりした太い指で、栄二を突き刺すように指さした。（さぶ）

このとき「栄二」は、「松田」によって指されるまで、自身が指されることを知り得ない。すなわち（6）は、「松田」が「栄二」を指せる状況であるが、「栄二」の方から「松田」を指せる状況ではない。
　会話の参与者 2 人が双方向的な関係にある（これがＳとＨである）ことが、人称区分型の特徴である。したがって、「松田」と「栄二」が一方向的な関係にある（6）は、人称区分型とは言えない。
　それでは、（6）は距離区分型であろうか。しかし、「松田」は指示者の領域にいるが、「栄二」は同じ（指示者の）領域にいるのではない。「栄二」は、「松田」と異なり、あくまで被指示者の領域にいる。

会話の参与者２人が同じ（指示者の）領域に存在している（これがＳとＡである）ことが距離区分型の特徴である。したがって「松田」と「栄二」が異なる領域にいる（6）は、距離区分型とも言えない。

このように、指示行為の直前、（6）のような人称区分型と距離区分型に分化する前の原初的な型が生じる。金井（2007、2010）では、これを中間型と称した。

（7）中間型




（Ｓ：話し手、Ｈ’：聞き手’）[3]

この中間型を「蝶番」のように扱えば、ソ系の聞き手用法と中距離用法の統一的な説明への道が開けるだろう。

## ３．分析

### 3-1　２系列の指示語体系との類似性

人称区分型におけるソ系は、人称区分型の性質に沿って機能する。同様に、距離区分型におけるソ系は、距離区分型の性質に沿って機能する。つまり、2 つのソ系の機能の仕方は、それぞれ 2 つの型からのバイアスを受けているわけである。

統一的な（原初的な）ソ系の機能とは、この 2 つの型に分離する前のソ系の機能であるだろう。その分離する前の型というのが中間型に他ならない。

（7）をよく見てみると、Ｓは自身の領域をコ系で指している。つまりＳの領域は「＋近」である。一方、Ｈ’の領域は、Ｓの領域を除いたすべての領域である。そのＨ’の領域は、「＋近」を除いた領域であるから、「－近」と表すことができる。

そして「－近」の領域すべてをソ系で指せるわけだから、中間型における原初的なソ系の素性は［－近称］であると分かる（Ｈ’の存在が予期される限り、ア系の領域は消滅する）。

この捉え方は、2 系列の指示語体系と同じである。2 系列の指示語体系では、日本語のような 3 系列とは異なり、領域を［遠近］の二分法

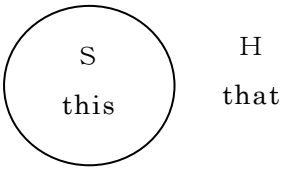
[3] 中間型における「聞き手」は、指示行為の直前までは、あくまで潜在的な聞き手である。これを本稿では、Ｈ’（聞き手’）と表記する。

で捉える[4]。

ここでは 2 系列の例として英語の this と that を取り上げる。英語では話し手から近い領域は this によって、話し手から遠い領域は that によって、それぞれ指すことになる。

2 系列の遠称は、聞き手用法に特化しているわけではない。2 系列の遠称が聞き手を指すことができるのは、「話し手から遠い領域」内に「聞き手の領域」が含まれる、という使用原理による[5]。

（8） 2 系列の指示語体系（英語）




（S：話し手、H：聞き手）

ここで（7）と（8）が同じ構図であることに気づく。つまり中間型では、2 系列の指示語体系と同様、前提的に聞き手の領域が存在するのではない。そうではなくて、聞き手を指示することによって、話し手から遠い領域として、新たに聞き手の領域が立ち上がるのである（そして中間型は対立型に移行する）。

したがって、中間型におけるコとソの素性は（2 系列の指示語体系と同じく）次のように表すことができる。

（9） コ：＋近称
　　ソ：－近称

---

[4] 諸言語の指示語体系は、2 系列と 3 系列に大別される。

Demonstratives ... may have a two-step or a three-step distance contrast. The two contrasting systems were represented as

[+Proximal]:[-Proximal]

[Proximal]:[Medial]:[Distal]

The Medial category in a three-step system has ‘short distance from Speaker’ and ‘close to Hearer’ as the two elements of its semantic prototype. (Fllimore1982:55)

[5] したがって、2 系列では「話し手」対「聞き手」の関係が安定してきた後も、3 系列のような対立型（=1）が構成されるのではなく、話し手と聞き手の各々が自身をＳに据えた（8）の型が構成されるものと考えられる。つまり、2 系列におけるＨの性質は、Ｈ’と等しいものであろう。英語と同じく 2 系列の中国語（近称＝这、遠称＝那）においても「ワレの領域に対立してナレの領域というものをマークする指示形式を特に持ち合わせていない」（木村 1992：187）。そのゆえ、2 系列の遠称は、3 系列の中称と遠称に跨いで対応することになるのである。

### 3-2　話し手占有領域

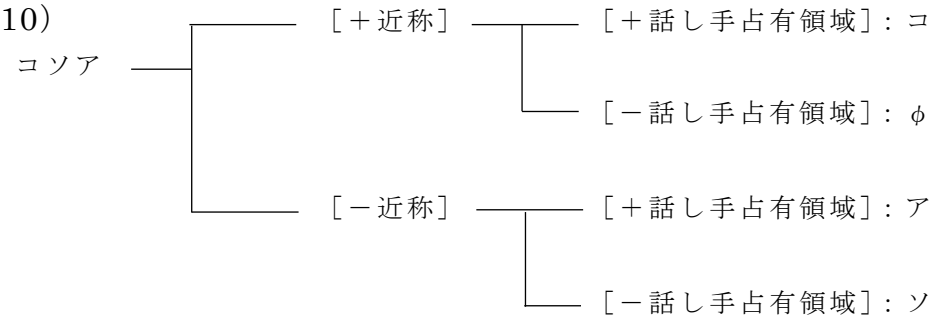
3 系列の体系も、原初的な段階では 2 系列であることを見てきた。それでは、英語のような 2 系列と、日本語のような 3 系列とは、どのように分岐するのだろうか。本稿では、以下のように考える[6]。

1 つは［－近称］の領域が、それより分割されない 2 系列である。そしてもう 1 つは、［－近称］の領域が、［±話し手占有領域］という基準によって、さらに 2 分割される 3 系列である。

ここで、［＋話し手占有領域］はＳ以外の参与者を必要としない、という属性と定義する。また、［－話し手占有領域］はＳ以外の参与者を必要とする、という属性と定義する。

これに従うと、3 系列のコソアは、以下のような枝分かれ図で表すことができる。

（10）




以上の考察を、日本語の指示語に、具体的に適用してみよう。

（11）（電車内で、向かい側の座席に置かれた箱を指して。独り言）
「??その箱は何だろう。誰かの忘れ物かな」（=5）

独り言では話し手の他に参与者が存在しないため、ソ系の［－話し手占有領域］が満たされず、（11）は不適格となる[7]。

これとは対照的に、ア系は、同場面で自然に使うことができる。

（12）（電車内で、向かい側の座席に置かれた箱を指して。独り言）
「あの箱は何だろう。誰かの忘れ物かな」

---

[6] ここで行うのは通時的な考察ではなく、共時的な考察である。

[7] 日本語と同じく 3 系列の韓国語（近称＝이、中称＝그、遠称＝저）でも、中称は同様の性質を持つ。「この用法（独り言における距離区分型；引用者注）にはソ系の指示形式が現れない。韓国語の場合も全く同様で、いわゆるソ系に当たるユ系は現れない」（宋 1991：10）。

独り言では、他の参与者の有無にかかわらず、ア系の［＋話し手占有領域］は満たされるから、（12）は適格となるのである[8] [9]。

それでは今度は、ソ系が自然に使える場合を考えてみよう。ソ系の素性は［－話し手占有領域］であり、話し手の他にも参与者が必要となる。その参与者とは原理上、聞き手か相手である。

（13）（電車内で、向かい側の座席に座っている花子の持つ箱を指して）
太郎「花子ちゃん、その箱、何が入ってるの？」
花子「次郎君へのプレゼントが入ってるのよ」（花子＝H）（=2）

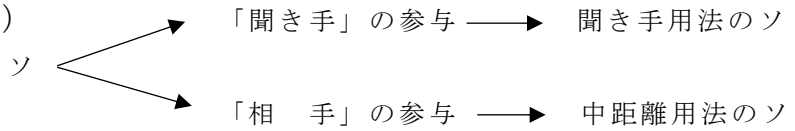
聞き手の参与が［－話し手占有領域］を満たし、（13）は適格となる。

（14）（電車内で並んで座る太郎と花子が、向かい側の座席にある箱を指して）
太郎「花子ちゃん、その箱、誰かの忘れ物かな」
花子「そうね、次の駅で、駅員さんに知らせてあげようか」
（花子＝A）（=4）

相手の参与が［－話し手占有領域］を満たし、（14）は適格となる。

以上から、ソ系の 2 用法は、S 以外の参与者の存在によって、次のようにして決まることが分かる。

（15）




ここで強調しておきたいのは、原初的なソ系の機能は［－近称］だけであり、「聞き手」「相手」の登場を待って、事後的に「聞き手用法」「中距離用法」という用法が決定していく、ということである。

### 3-3　中距離とは何か

コ系が近距離を、ア系が遠距離を指すことは（外的な要因の介入が

---

[8] （14）のように相手がいる場合には中距離と認識される領域でも、独り言ではソ系が使えないため、ア系かコ系に振り分けられることになる。すなわち、独り言では完全に 2 系列（コ対ア）となっている。

[9] ここでの議論は、コ系についても有効である。また（10）でコ系の次段がφ（該当なし）であるのは、［＋近称］かつ［－話し手占有領域］という領域は原理的に存在し得ないと思われるからである。

ない独り言においてそうであることから）積極的な属性と言える。

一方、ソ系の中距離用法は、独り言では現れず、その成立が相手というＳ以外の参与者の存在に左右される。これを鑑みると、中距離を指すという属性は、外的な要因に助けられて消極的に成立するものであって、積極的な属性であるとは言えない。

それでは、この中距離を指すという属性は、どのようにして生じるのだろうか。本稿では、以下のように考える。

（16）ＳとＡが指示対象に協同的にアクセスすることが、その指示対象が両者から等距離にある、という含意を生じる。

（17）〔Ｓ⇔Ａ〕間の距離が意味を持たないほど、〔Ｓ(/Ａ)⇔対象〕間の距離が近い／遠い場合、中距離の領域は成立しない。

### 3-3-1　協同的アクセスについて

例えば、［＋話し手占有領域］のア系を使用するには、他の参与者がいるかどうかは関係ない。（18）のような独り言でも、（19）のように相手がいる場合でも、ア系は自然に用いることができる。

（18）（電車内で、向かい側の座席に置かれた箱を指して。独り言）
「あの箱は何だろう。誰かの忘れ物かな」（=12）

（19）太郎「花子ちゃん、あの山、何ていう名前？」
花子「あ、あの山は、高尾山っていうのよ」（花子＝Ａ）

（19）の「太郎」と「花子」は、「あの山」に協同的にアクセスするのではない。そうではなく、2 人は同一の指示対象に個別にアクセスするのである[10] [11]。

これとは対照的に、ソ系の場合は個別にアクセスするのではなく、協同的にアクセスする。

（20）（電車内で、向かい側の座席に置かれた箱を指して。独り言）

---

[10] このことは、記憶指示のア系が、話し手と聞き手の共通の記憶ではなく、実は話し手のみの記憶を指すという現象と、共通の認知的基盤を持つ。以下の発話では、「僕」は「先生」を知っているが、「君（聞き手）」は知らない。
「僕は大阪では山田太郎という先生に教わったんだけど、君もあの先生につくと、きっと何とも言えないユーモラスな人柄に魅せられるよ」
（黒田 1979：55、下線は引用者による）

[11] ここでの議論は［＋話し手占有領域］を指すコ系にも当てはまる。

「??その箱は何だろう。誰かの忘れ物かな」(=5)

（21）（電車内で並んで座る太郎と花子が、向かい側の座席にある箱を指して）
太郎「花子ちゃん、その箱、誰かの忘れ物かな」
花子「そうね、次の駅で、駅員さんに知らせてあげようか」
（花子＝A）（=14）

ソ系による指示は、独り言の（20）では不適格だが、相手が参与する（21）では適格となる。それは、ソ系による中距離指示が、Sが指示対象を指したことをAが確認し、Aが確認したことをSが確認し…、というように、相互に確認し合いながら行われる（これを協同的アクセスと呼ぶ）からだと考えられる。

そのようなアクセスの仕方をする限り、指示対象は、SにもAにも占有的に所属しない、中立的な存在でなければならない。この制約によって「SからもAからも等距離の領域」が生じるのである。

### 3-3-2　意味を持つ距離について

では、〔S⇔A〕間の距離が意味を持つ／持たないとは、どのようなことだろうか。

（22）太郎「花子ちゃん、あの山、何ていう名前？」
花子「あ、あの山は、高尾山っていうのよ」（花子＝A）（=19）

SもAも、対象をア系の指示語で指している。ア系で指すことの含意は、〔S(/A)⇔対象〕間の距離が、〔S⇔A〕間の距離に対して、比較にならないほど遠すぎる（とS(/A)が認識している）ということである。逆に言えば、〔S⇔A〕間の距離は近すぎて意味を持たない距離であるということである。

（23）太郎「花子ちゃん、この看板、何て読むのかな？」
花子「え、この看板？ 私も分からないわ」（花子＝A）

SもAも、対象をコ系の指示語で指している。コ系で指すことの含意は、〔S(/A)⇔対象〕間の距離も、〔S⇔A〕間の距離も、どちらもゼロと捉えられるほど近い、ということである。したがって〔S⇔A〕間の距離は、やはり意味を持たない距離と言える。

〔S(/A)⇔対象〕間の距離が（22）ほど遠くなく、（23）ほど近くないという場合にのみ、〔S⇔A〕間の距離が意味を持つ。このとき初め

て、そのような領域を指す指示語として、（コ系でもア系でもない）ソ系の存在が必然性を帯びてくる。

このようにして、ソ系で指す「ＳからもＡからも等距離の領域」がＳ(/A)から近くも遠くもない範囲＝中距離に、消極的に決まっていくのだと考えられる。

以上、3-3 での考察から、中距離という領域は、ＳとＡから等距離にあり、両者から近くも遠くもない範囲にある、ということを導き出すことができる。このように中距離の領域は、積極的かつ独立的に決定されるのではなく、種々の外的な要因の複合的な結果として、消極的に決定されていくのである。

## ４．まとめ

本稿の基本的な主張は、以下のように整理できる。

コソアは、まず［＋近称］か［－近称］かという基準によって二分される。この段階では、2 系列の体系と同様である。［＋近称］がコ系で、［－近称］がソ系とア系である。

次に［－近称］は、［±話し手占有領域］という基準によって、さらに二分されていく。［＋話し手占有領域］ならばア系、［－話し手占有領域］ならばソ系となる。

ソ系の場合、［－話し手占有領域］を満たすためには、Ｓ以外の参与者（ＨあるいはＡ）が必要となる。Ｈが参与すれば聞き手用法に、Ａが参与すれば中距離用法になる。

本稿の目的は、三上（1953、1955）の double binary を否定することではない。double binary は、それぞれの指示語が、どのような場面でどのような領域を指すか、ということを正確かつ簡潔に予想することができる。

しかしながら、double binary 的な捉え方は、聞き手や相手の存在を前提として構築されたものであって、したがって、この捉え方に立つ限り、ソ系の指示語の統一的な説明は叶わない。

（24）指示語体系コソアの double binary 的な捉え方

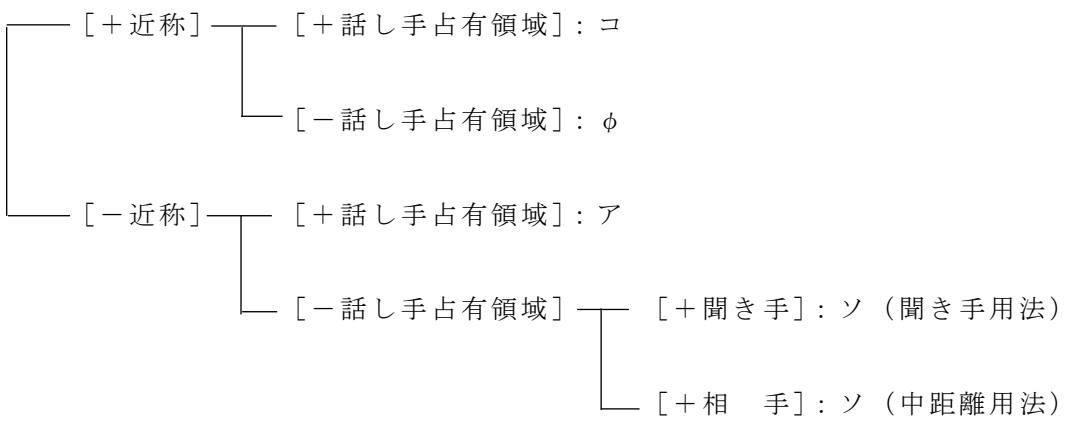
- 人称区分型 ―― 話し手：聞き手 ―― コ：<u>ソ</u>
- 距離区分型 ―― 近距離：中距離：遠距離 ―― コ：<u>ソ</u>：ア

（24）において下線を引いた２つのソは、それぞれ異なった体系の一

角を占めている。このような異なった出発点からは、統一的な説明に至ることはできない。

そこで本稿では、話し手＝指示主体を基準とした一元的な捉え方として、次の枝分かれ図（25）を提案する。

（25）コソアの統一的な捉え方




ソ系の聞き手用法と中距離用法を統一的に説明することは、指示語研究に残された課題の１つである。また、3 系列と 2 系列の対照研究のためにも、このような統一的な説明が必要不可欠となる。本稿は、そうした課題に答えることを試みた論として、位置づけられる。

## 参考文献

金井勇人（2007）「聞き手を指す「そちら」と「そこ」について」『日本語教育』134，pp.110-119，日本語教育学会

金井勇人（2010）「なぜ聞き手を指す「そこのＮ」は非丁寧になるのか」『日本語/日本語教育研究』1，pp.139-156，日本語/日本語教育研究会（ココ出版）

木村英樹（1992）「中国語指示詞の「遠近」対立について―「コソア」との対照を兼ねて―」『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』pp.181-211，くろしお出版

金水敏・田窪行則編（1992）『指示詞』ひつじ書房

黒田成幸（1979）「（コ）・ソ・アについて」『林栄一教授還暦記念論文集・英語と日本語と』pp.41-59，くろしお出版

正保勇（1981）「「コソア」の体系」『日本語の指示詞』pp.51-122，国立国語研究所

宋晩翼（1991）「日本語教育のための日韓指示詞の対照研究―「コ・ソ・ア」

と「이・그・저」との用法について―」『日本語教育』75，pp.136-152，日本語教育学会
三上章（1953）『現代語法序説』刀江書院
三上章（1955）『現代語法新説』刀江書院
Fi11more，Charles J.（1982）“Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis,” Robert J.Jarvella and Wo1fgangKlein (eds.) *Speech, Place, and Action: Studies in Deixis and Related Topics*, pp.31-59, John Wiley & Sons Ltd.

## 引用資料

山本周五郎『さぶ』新潮文庫

（埼玉大学人文社会科学研究科准教授）